

HISTORY OF FURUNO

1938年～



世界初魚群探知機の実用化に成功

古野清孝が、長崎県口之津町（現在の南島原市）に古野電気の前身である「古野電気商会」を創業。船舶の電気機装工事などを請け負うなか、漁業を近代化したいという気持ちから、弟清賢と共に「魚群探知機」の開発に挑み、旧日本海軍の放出物資であった「音響測深機」を改良し、1948年に世界ではじめて「魚群探知機」の実用化に成功する。

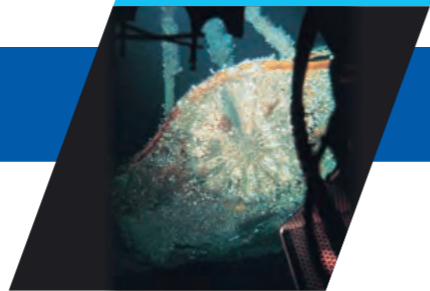
1970年～



世界の“FURUNO”へ

1972年、魚群探知機部門で米国海洋電子機器協会（NMEA）最優秀メーカー賞を受賞。1977年、船舶用電子機器では歴史も実績もある英国のデッキを抜き、船舶用レーダー部門で最優秀メーカー賞を受賞。また、1974年にはノルウェーにはじめての子会社を設立。その後、1978年にアメリカ、翌1979年にはイギリスに子会社を設立し、本格的に海外進出を始めた。

1980年～



戦艦「大和」の発見へと導いたFURUNOの電子機器

1985年、「戦後40年目の海への鎮魂」の一環として行われた「戦艦大和の探索」計画に協力。FURUNOの役割は、これより3年前に行われた大和の沈没位置の再確認と、その形状や沈没状況、また海底地形などの事前調査であった。これを当時開発されたばかりの三次元ソナー（海底探索装置HS-100）で探索し、水深350mの海底で眠る戦艦「大和」の幅、高さ、長さはもちろん、その形状、沈没状況などを三次元で捉えることに成功し、探索に貢献した。

1990年～



新たな市場、分野への本格参入

船用事業では商船市場へ参入し、GMDSS（全世界的海上遭難安全システム）や、船舶の機関制御機器、通信機器などをすべて統合し、すべての情報を1箇所ですべて管理/操作できるようにしたIBS（総合化ブリッジシステム）を開発。陸上分野では、船用機器で培った技術を活かし、GPS機器の開発に取り組む。

2000年～



新分野への挑戦

船用機器で培った技術を活かし、カーナビゲーション用GPS受信機やデジタル放送設備向けのGPS応用製品、ETC車載器などのITS機器を開発。また、独自の超音波技術、電波技術などを用い、骨密度測定装置や生化学分析装置などの医療機器を開発する。

